ロマン・ロランと『赤旗』の「訴え」 (1932年7月20日)

高 橋 純

フランス共産党の機関紙「ユマニテ」1932年9月29日版第1面にLa terreur blanche au Japon (日本の白色テロ)と題された大きな記事が掲載された。この記事は、はじめに事の経緯を説明するコメントがあり、続いてロマン・ロランから共産党首マルセル・カシャン宛ての依頼状、そして1932年7月20日の日付をもつ日本共産党中央委員会のアピールのフランス語訳が掲載されている。「以下がその全訳である。

日本の白色テロ

我々のもとにロマン・ロランから書簡が届いた。以下にこれを、日本共産党の訴えと併せて 掲載する。

我々の同志は自国においてこの上なく英雄的な反政府運動を展開しているが、この間の犠牲者は数千の数に上っている。彼らはその活動を非合法で行うしかないゆえに、以下で日付を突き合わせてみれば、活動の裏付けとなる文書資料をこのヨーロッパにまで届けるためにいかに大なる犠牲を払わなければならないかがわかるだろう。

日中戦争開始以降 2 、またフランス帝国主義に援護された満州事変以降、我らが同志に向けられる攻撃は非道さを増すばかりである。

ここにおいて西洋プロレタリアートは、その同志たちが果敢な抵抗運動において示す勇気に 胸打たれずにはいられない。先のアムステルダムの会議[1932年8月の世界反戦大会]におい て緊要とされたことがある。それは、すべてのプロレタリアート、なかでも社会主義的労働者 大衆を促して、日本の革命的人民との連帯を表明し、東京の帝の同盟者たるこの国の政府を含 む彼らの迫害者に圧力をかけることである。

以下がロマン・ロランの手紙である。

親愛なるマルセル・カシャン、

日本から私のもとに知らせが届いています。そこに同封されていた日本共産党の訴えをあなたにお渡ししますが、これは党の非合法新聞に掲載されたものです。有罪宣告を受けた不幸な人々を救える可能性は無きに等しい。しかし彼らの仲間たちは世界に向けて、せめてその憤激の叫びを届かせたいと、悲痛な訴えを送ってきているのです。私はあなたならばこの訴えを「ユマニテ」紙上に迎えてくださるものと考える次第です。 敬具

ロマン・ロラン

国際プロレタリアートに訴える

全世界の同志、労働者、農民、被雇用者、プロレタリアの諸君!

さる7月5日、天皇の法廷(軍国ファシズム掌中の傀儡にすぎない)において検事総長は、191名の我らが同志に対し、死刑、無期懲役、総計1000年に及ぶ禁固刑という過酷極まる求刑をした!

この191名は犠牲者のわずか一部にすぎない。1928年以降(すなわち1928年3月15日の大量検挙、1929年4月6日の検挙等)テロ体制の下で繰り返された大量検挙により何年にもわたって投獄されてきたコミュニストの犠牲者は幾万の数に上るのである。この191名は日本のコミュニストの前衛であり、ブルジョワ政府と果敢に闘って日本の労働者、農民、被雇用者の立場を守り、彼らを新たなソヴィエト政府の建設へと導いてきたのだった。

囚われの同志のなかには、日本共産党の組織の中核を担う者がおり、同じく日本共産党の創設メンバーも含まれている。天皇の法廷は彼らを帝国主義的テロリズムの法で裁かんとしている。これまでに20名が、法定取り調べを受けることもなく、幾年にもわたる投獄のあげく、拷問と栄養失調のために死亡した。6名の同志は拷問の苦痛をこらえきれず正気を失い、その他幾名もが病に倒れた。

にもかかわらず、我らが同志は勇敢に法廷での闘いを堪えぬき、真のコミュニストの闘争心を堅持し続けており、彼らの偉大な戦いは搾取される労働者、農民、被雇用者に真に自らあるべき姿を自覚させたと同時に帝国主義政府の憎悪をも買わずにはいなかったのである。

※

「二千年にわたる神聖不可侵なる帝の国!」実のところそれは日本のプロレタリアとその党に対する暴虐と搾取のための仮面に他ならないのである!

昨年来、労働者のデモ、集会はことごとく解散させられ、禁止されてしまった。にもかかわらず、工場労働者や農民たちは常軌を逸した暴虐に抗して幾百の抗議の声を上げ、囚人の解放を求めるデモを組織してきた。さる7月19日には東京で大規模なデモが行われたが、これはただちに禁止され、暴力的な対抗デモが放たれたのである。

同志よ!諸君のもとでも革命的労働者に対するテロと暴虐が見られるであろう。

我らが極東にあっては、中国において、韓国において、台湾においても、白昼堂々革命家に 私刑が加えられ、法の裁きもなく殺害されてしまうのである。

だがしかしわれわれはなおも現状に立ち向かうことができるであろう、我らが191名の同志の解放を求める全世界の人民大衆の大いなる運動に支えられ、すべての国のプロレタリアの抗議の声に支えられるならば。われわれは全世界のプロレタリアに訴える、我が国の帝国主義の犠牲者の解放を願う諸君の力強い支援を求め、待ち望んでいる!

我々は、死刑、無期懲役、総計1000年に及ぶ禁固刑を宣告された191名の日本コミュニストの解放を要求する!

我々は白色テロに抗議する!

我々は、中国におけるソヴィエト革命の防衛支持を表明する!

我々は、日本による満州植民地化に反対する。

我々は、日本陸海軍が中国から直ちに撤退することを求める。

我々は帝国主義戦争反対を言明する!

1932年7月20日³ 日本共産党中央委員会



「ユマニテ」1932年9月29日版第1面

ロマン・ロランがフランス共産党主マルセル・カシャンに依頼状とともに送って仲介の労をとった結果、こうして日本共産党中央委が全世界の同志に向けて呼びかけたアピールが「ユマニテ」

紙に掲載されるに至ったわけである。このアピールの原文は当時の日本共産党の機関紙「赤旗」 1932年7月30日版第2面に掲載されている。4以下がその日本語の「訴え」の全文である。5

日本に於ける一九一人の共産主義者の求刑に對して 世界のプロレタリアート勤労大衆に訴ふ

全世界のプロレタリアート勤労大衆諸君!

去る七月五日軍事的警察的天皇の裁判所に於いて、日本に於ける共産主義運動の前衛百九十一名に対して死刑無期懲役一千年に及ぶ重刑の検事求刑が行われた。

百九十一名は其の前後に同様な残虐な投獄テロルを受けつつある数万の同志の中で特に三・一五事件(一九二八年三月十五日の日本共産党員に対する大衆検挙)並に中間、四・一六(翌年四月十六日の検挙)の日本の党に下された弾圧に依る数万の犠牲の一部の同志等である。同志達は日本の労働者農民勤労大衆の利益擁護のために闘争し、日本に於ける労働者農民の政府(ソヴェート)樹立の闘争の先頭に立ちこれを指導した同志達である。

そこには党創立以来の指導的同志がゐる。

天皇の裁判所は有名な死刑法治安維持法を適用した。それでもたりないと彼等自身のブルジョア的法律を自ら打ち破ってまで一層残虐な「法の適用」を行ったのである。

拷問と極度の不衛生、永い期間五年間審問も受けずに独房に投獄され二十数名は死亡し、六名の同志は発狂し他の凡ての同志は疾患に苦悩してゐる。それにも拘わらず同志達は公判廷に於ける共産主義者の態度を理解し、党員としてボリシェヴィクとして行動した。昨年の夏以降現在に至るまでの公判廷に於ける闘争は、日本の勤労大衆を覚醒せしめ、この無残な大衆投獄に対する憎悪を燃えたゝしめた。

「一千年来の天皇制の神聖」⁶に就いて、それが野獣的な日本プロレタリアートとその党に対する抑圧と搾取のための粉飾であること、

一ヵ年間の継続的公判廷の内外と刑務所に於ける警戒更に七月五日には日本の裁判所始まって以来の警戒が行われた。四百余名の天皇の警察官は凡ゆる場所に配置された、凡ての労働者 農民の集会とデモンストレーションはそれを口実として一層弾圧された。

見よ!それにも拘わらず全国の工場農村からは数百通の裁判に対する抗議が送られ釈放要求の集会が行われた。七月十九日には東京に於いて釈放要求の数百名の大衆的集会が持たれた。 集会は即時禁止されたのに大して、デモンストレーションを持って抗議した。

全世界のプロレタリアート勤労大衆諸君!

革命的労働者に対するかくの如き抑圧とテロルとは社会主義ソヴェート共和国連邦を除く凡 ての国々に於いて見ることができる。

ドイツではナチスと政府の妥協の下に共産党を地下に追いやろうとしてゐる。至るところで 毎日の様に革命的労働者に対する殺害が報ぜられてゐる。

アメリカでは悪辣な私刑裁判が公然と行われてゐる。スカッツバラの八人の黒人少年ハーランの三十六人の鉱山労働者に対するに電気椅子に依る虐殺が企てられてゐる。

中国朝鮮台湾では最も憎むべき野蛮な殺戮が白昼公然と一片の審問もなく行われてゐる。中欧諸国に於いても「危険思想」犯人に対するテロルが一層強化されたことを知ってゐる。

全世界に於ける支配階級とその支持者其の手先社会ファシストに対する闘争は日本に於けると同様に経済恐慌が深まれば深まる程、資本主義の腐朽が激しくなればなる程、戦争とソヴェート同盟に対する干渉との危険はより鋭くなり国内に於ける大衆的テロル虐殺投獄に依って勤労大衆に対する抑圧と搾取を強化するのだ。

然しながらかゝる抑圧と搾取、戦争とソヴェート干渉とにも拘わらず不可避的に大衆の革命的な闘争への道をより大衆的により急速に銃運日しつつある。

全世界のプロレタリアートは其の同僚とその指導者に対する狂いじみた殺戮に沈黙してゐない。

米国のスカッツバラの黒人少年、汎太平洋労働組合書記局同志ルーエッグ等々に対する革命 的釈放要求の国際的闘争は幾百万の大衆の自発的意志に依って展開されてゐる。

我々は又日本の凶悪な天皇政府に依って投獄されてゐる数千の同志先輩又特に今度の百九十一名の共産党員に対する釈放のために、数多区の支持と激励と自国に於ける大衆の間での抗議のための大衆的活動を組織してゐることを知ってゐる。

我々はこれらの革命的大衆諸君とその組織に対して、今此処に満腔の敬意と一層の信頼を表すものである。この闘争は大衆テロルが独り日本のプロレタリアートのみならず国際プロレタリアートに向けられたものであることの事実の証明である。

全世界のプロレタリアート勤労大衆諸君!

現在程我々にとって革命的国際的連帯の必要を痛切に感ぜしめた時期はなかったのである。

日本の帝国主義者が世界戦争の先頭に立っているときに行はれた白色テロルの横行は言語に 絶してゐる。それは独り日本だけではないのだ。全世界が入り込みつつある強盗的戦争、帝国 主義列強をして今は唯待機せしめているものゝ如くであるソヴェート干渉の危険は現実に切迫 している一方ソヴェート同盟の五ヵ年計画の嵐の如き成功と全世界の支配されているプロレタ リアート勤労大衆の革命的昂揚が存在する。

かゝる階級闘争の未曾有の激化は不可避的に国際赤色統一戦線を強化し足し一層拡大セ氏無べき階級的任務を有するに至った。

日本帝国主義者の憎むべき貪欲の表現満州上海両攻撃に対して又極東に於けるソヴェート同盟に対する干渉活動の先頭に立っている事に対し全世界のプロレタリアートの嵐の如き共同反抗と闘争の事実、全世界の被圧迫勤労大衆とその指導者に下された陰惨な白色テロルの魔手に対する地球の凡ゆる隅々からの共通の憤怒と憎悪とが力強い連帯の闘争の事実とが如実に連帯の必要と任務とを物語るものである。

日本の共産主義者百九十一名に対する如上の求刑は九月中天皇の奴僕に依って判決を宣される事になってゐる。

死刑と長期求刑を課せられた前衛とこれに対する日本のプロレタリアートの革命的釈放要求のための闘争を諸君の前に報告することは我々の義務であると信ずる。我々は諸君の革命的な同志的な支持に依って我々は一層成功し得ることを確信する。

同志諸君!我々は百九十一名の同志を資本家的地主的天皇の自由に委さないために闘争する ことを期さう。我々は一層精力的に我々の手に彼等を奪いかへすために広汎な大衆的抗議を組 織することを誓言する。

我々は日本のプロレタリアートを代表して今よりも一層諸君の力強き支持と援助を期待し日本の共産党員の処刑阻止のために努力せられんことを希望する。

日本に於ける百九十一名の共産党員に対する死刑無期懲役一千年に及ぶ重刑反対、階級的政治犯人を即時釈放せよ!

全世界の労働者階級に加えられる白色テロルに抗議せよ!

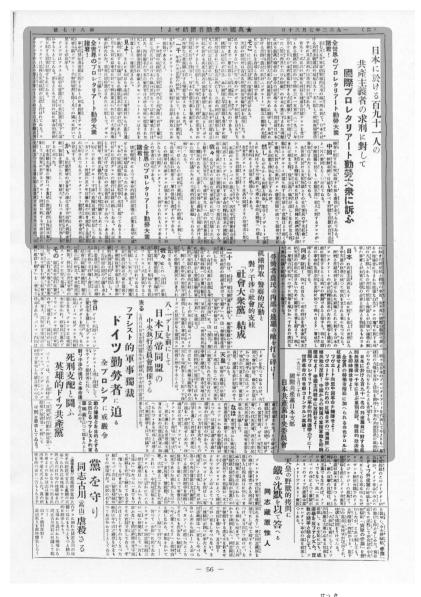
ソヴェーと同盟中国革命を擁護せよ!

ソヴェート干渉のための足場日本の「満州国」の植民地化反対!中国からの列強の軍隊軍艦 を即時撤退せよ!帝国主義戦争に反対せよ!

国際プロレタリアートの革命的共同連帯の下に!

世界革命の司令部コミンテルン万歳!

一九三二年七月二十日 国際共産党日本支部 日本共産党中央委員会



「赤旗」1932年7月30日版第2面

日本共産党中央委のこの「訴え」は、「コマニテ」の記事を日本語訳して比べると、字数的には半分の長さに要約されフランス語訳されてロマン・ロランのもとに届けられたと考えるのが自然であろう。ロマン・ロランはこの文書について、「日本から私のもとに知らせが届いています」とマルセル・カシャンにさりげなく告げているが、実際にはそれは直接日本から彼のもとに届いたものではなく、当時フランス国内に滞在していてロマン・ロランと最も近しかった日本人彫刻家の高田博厚であったと推定できる根拠がある。以下の高田自身によって残された記述がそれである。7

私は思いがけぬ機会に会って、間もなくイタリア巡礼に出た。そしてこの年の夏にクラマールに移り、十一月にはスイスのロマン・ロランの家に、ガンジーに会いにでかけた。8この期間のいつ頃だったかは覚えていないが、ある日日本から厳重な封をした郵便小包が届いた。開けてみると『無産者新聞』で、小林多喜二が拷問獄死した追悼の特別号である。遺骸を囲んだ「同志」たちの大きな写真が載っている。これをフランスの同志たちに伝えてほしい。抗議の文を『ユマニテ』紙に出してほしいと手紙が添えてあった。9

私はその新聞を持ったまま、市街電車に乗り、座席で広げて読んでいた。日本語だから誰にもわかりっこない……ふと眼をあげると、私の前につり革にぶらさがって日本人が立っており、びっくりしたような顔で私を見ている。間もなく後に知り合ったのだが、これが嬉野満州雄だった。「パリに着いたばかりで、電車に乗ったら、『無産者新聞』読んでる奴がいる。あんなにおどろいたことはなかった」10

『ユマニテ』紙に抗議文を出すのにどうしようか? 共産党のマルセル・カシャンと親しい画家のポール・シニャックが私を大事にしてくれているので、まず彼に相談した。「それはぜひ出さなければいかん!」と彼の方が大乗気だが、私の名は出せない。「まず、スイスのおやじさんに相談してみろ」。私はロランに書いた。即座に返事が来て、「私が全責任を負う。今フランスは反動政府だから、君の名を出したら、いっぺんに追放されてしまう」。私は新聞の記事の大意をフランス語で書いて、新聞といっしょに彼の許に送った。『ユマニテ』紙は全面をあげて、ロランの抗議文と小林の遺骸の写真を転載した。(小林の死を一九三二年のように思っていたが、一九三三年だったと知らせてくれた人があった。またその頃『無産者新聞』はすでになく、『赤旗』に変わっていたという。)11

これは高田の回想録『分水嶺』(単行本初版は1975年)の中の一節である。この引用箇所について高田は雑誌掲載時の自分の記憶違いを認めつつも最初の記述を全く修正していない。そのこだわりの裏には、40有余年を経て記憶のみを頼りに記された回想録の中に事実との不一致が入り込むことが避けがたいとしても、高田にとっては否定しがたい何らかの真実が潜んでいると確信できたからこそであろう。

では彼の記憶の錯誤は正確にはどこにあったのか。高田が言及している新聞記事が本当に小林 多喜二追悼の記事であったとするならば、高田が1932年の出来事として回想しているすべての ことと齟齬を来たす。それに対して、ここで問題とされているのが実際には1932年の新聞記事 で報じられた何らかの出来事であったとするならば、「パリに着いたばかり」の嬉野満州雄との出 会いを含め、ここに語られていることがすべてそれなりの整合性を持つと考えられる。そこでこ の出来事を1932年のこととして高田の記述に従うならば、その新聞の内容は(高田による翻訳を **通じて)** ロマン・ロランに伝えられ、その後に(つまり日本から発せられた「フランスの同志た ちに伝えてほしい」情報が高田、次いでロマン・ロランを経由することによる時間的なインター バルをとって)「ユマニテ」の紙面に現れることになるはずである。その際には、「私が全責任を **負う。今フランスは反動政府だから、君の名を出したら、いっぺんに追放されてしまう」と語っ** たロマン・ロランの配慮もあって、高田博厚の名が出ることは決してない。さらに、ロマン・ロ ランの仲介を受けた「ユマニテ」が「全面をあげて」協力をしてくれた結果、(多喜二の遺骸の写 真とは異なる)何らかの日本にまつわる写真が併載された記事が、「ユマニテ」紙の(おそらく は)第1面に掲げられることになるだろう。こうした推理に従って1932年の「ユマニテ」紙を精 査して発見されたのが、冒頭に掲げた、1932年9月29日版第1面のLa terreur blanche au Japon(日 本の白色テロ)なのである。

この年の春日本では共産党員に対する苛烈な弾圧が加えられ、これを逃れて小林多喜二も地下潜伏を余儀なくされた。同年7月20日の日本共産党中央委の「訴え」はこうした弾圧に抗する運動の中から打ち出されたものである。高田の記憶錯誤を含んだ証言がきっかけとなってか、戦後日本ではロマン・ロラン自らが多喜二虐殺に対する抗議文をユマニテに掲載したとも信じられるようになったが、その抗議文はいまだ見つかってはいない。しかしここでわれわれは、この伝説の抗議文の不在を嘆くよりも、当時危機にあった日本のコミュニストに共感して、「これをフランスの同志たちに伝えてほしい。抗議の文を『ユマニテ』紙に出してほしい」と高田に伝えてきた名の知れぬ友人の願いが、高田、そしてロマン・ロランの手を介して奇跡的に実現していた事実に改めて驚き、これを喜ぶことができるのである。

注

- 1 「ユマニテ」紙1932年9月29日版第1面に掲げられたこの記事の最上段には靖国神社境内にある「遊就館」 記事のキャプションには戦争博物館とある]前に仏軍海兵が整列した写真が併載されており、その写真下の説明には、「フランス帝国主義はおのれの軍隊をして、同盟国日本が満州において達成した略奪行為の経験から学ばせんとしている」と述べられている。
- ² ここで言われる日中戦争がいわゆる日華事変 (1937年-1945年) でないのは明らかである。おそらく、1928年に日中両国軍隊が衝突を起こし事件がきっかけとなった済南事件を指すと考えるべきである。
- 3 「ユマニテ」紙の現物では、日付がLe 20 juillet 1922となっているが、これは明らかに印刷上のミスであり、Le 20 juillet 1932が正しい。
- 4 この「訴え」の起草の日付が1932年7月20日、「赤旗」発行が7月30日、そして「ユマニテ」への掲載が9月29日という時間的隔たりが、「ユマニテ」紙記事冒頭で「以下で日付を突き合わせてみれば、活動の裏付けとなる文書資料をこのヨーロッパにまで届けるためにいかに大なる犠牲を払わなければならないかがわかるだろう」と述べられていることの根拠を示している。
- 5 この「訴え」のフランス語訳の長さについて、筆者は以前日本語文とフランス語文を大雑把に対比して、オリジナルはフランス語訳の3倍あるとしたが、同一のフォントで日本語訳を正確に比較してみると、フランス語

ロマン・ロランと『赤旗』の「訴え」(1932年7月20日)

訳はオリジナルの半分の長さであることがわかる。なおオリジナルについては転記の際に若干の旧字を改めてある。「多喜二とロマン・ロラン――伝説の「事実」と「真実」――」(「小樽商科大学人文研究」118輯、2009年)参照。

- 6 フランス語訳はこの個所は「2000年」となっている。日本語のオリジナルで「一千年」となっているのが誤りであるか否かは不明である。
- 7 高田博厚著『分水嶺』岩波現代文庫、2000年、pp. 74-75。『分水嶺』は1974年から1975年にかけて雑誌『世界』に連載されたものであり、その後単行本にまとめられたときに、この引用部分末尾にある括弧部のくだり(雑誌掲載時に周囲から指摘を受けた高田自身の記憶の誤り等)が書き加えられた。なお高田は1931年春にパリに到着し、その後ほどなくしてロマン・ロランの知遇を得るようになった。

また。「無産者新聞」は大衆的な政治新聞を謳って1925年9月に創刊された週刊新聞で、正式な機関紙である「赤旗」が1928年2月に創刊されるまでは戦前日本共産党の機関紙の役割を果たした。1929年8月に発禁処分が確定し、同月第286号をもって廃刊した。

- 8 マハトマ・ガンジーがスイスにロマン・ロランを訪ねたのは1931年である。(筆者注)
- 9 この小包と同封の手紙の主について、「赤旗」1974年2月20日版のインタヴューで「今もってわかっていない」と答えている。(筆者注)
- 10 嬉野満州雄がパリに到着したのは1932年である。(筆者注)
- 11 この引用箇所から、高田が多喜二の死を1932年と思い違いしていたことが指摘できるとしたら、それは、嬉野満州雄のパリ到着の年を正しく1932年と記憶している者(おそらくは嬉野自身による指摘)であるだろう。(筆者注)